



六
花

9

2020

りっかはいくかい

祝 善野行句集「聖五月」

山田六甲 長崎忌 紳九

秋めいて壘をも泣かす漢かな
東塔の勝ちけり蟬の鳴き相撲
畳むやうに作られてあり盆の棚
盆参り左手に桶提げにけり
仏壇に熟れしメロンを下げにけり
約束はことごとく反古盆の月
夏萩が句碑の一基に刈り込まる
署名入清張総編夜の秋
室津まで行かうと思ふ秋の雲

新人の急に増え来る猛暑でも
妹を背負ひし写真長崎忌
柵に精霊舟の夜が明くる
猛暑にて猫は我が家を忘じしや
鱗雲大仏殿をつつみけり
行一献奈良に行きしとビール干す
喫茶去に川柳問答して昏し
句碑ふたつ蝸の音に染まりある
猿沢の池を出てゆく鱗雲

△先月号の拙句、「大陸」とは
どこか、とお尋ねがあったが旅
順工科大学（中国大連）である。
今は大都市になつてはいるが昔は
麦畑が広大にあつたのだらうと
想像して詠んだ。祖父はそこを
出て日本で自動車のレンズ関係
の会社を興したが40代で亡く
なつた。我が家は父もその兄弟
も息子も若くして死んでいる。
私は幸いというか母系の血が濃
いのか、いまだに生きながらえ
ている△最近どうしたことか六
花で勉強をしたいという人が急
に増えてきた。ありがたいこと
である△この間毎日新聞にとこ
かの主宰の句集の一句が採り上
げられ「杉はいよいよ真直ぐ
にて」を「真直ぐに」でいいじゃ
ないか、と指摘していた。彼の
意見は正しいが、書かれた方は
今頃眠られぬにちがいない。俳
句の批判はいけない、俳句の世
界は狭いのである。以前「俳壇
はナアナアだから信用しない」
と作家の宮本輝さんが断言した
ことがある。批判に弱く狭い世
界なのだ。

火点きぬ川燈台や合歡の花

延川五十昭



岐阜大垣の水門川は芭蕉「奥の細道」結びの地である。今はその川は桜の時期の観光地になっていて住吉燈台に川舟が係留されている。燈台には火ともされていないが、その代わり明るい合歡の花が灯となっているよ、と挨拶したのだ。大垣は何もないところだと思っていたが、俳句を詠むには題材の豊富な街である。この川は揖斐川に通じており、そこから桑名へ通じていたのだ。芭蕉はここで歓待してくれた門人に今から行く桑名の蛤を題にして「蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ」と挨拶した。

芍薬の活けておおきくほどけけり 善野行



「活けて」とは、「路地の芍薬と比べて」ということ。室内に取り込んだことによって、芍薬の意外な見え方（印象）が違ったのが、気づき。室内は屋外とは見えかたが違う。この句の呼吸がどれだけ読者に伝わるかわからないが例えば床の間に生けた花の開いて散る（ほどける）音まで聞こえてくるようだ。私も昔、雪柳が水の放物線のような咲き方と想っていたが、活けると振られていることに気づいたことがある。

夏帽子 ◎ 笹村 政子

桂林のカンテラゆるる鵜飼舟
篝火の燃ゆる水面に鵜を放つ
女学生五人玉色のソーダ水
子の拳ぱつと開けば青蛙
羽を打つ蝶に兄呼ぶ補虫網
揚羽蝶ステンドグラスのぼりゆく
藻の花や髪梳くやうに水流れ
朴の花夜は月光に抱かるる
箸置の鮎の跳ねたる夏料理
在りし日の兄の見立ての夏帽子

△鵜飼は中国旅行の折の記憶をたよりに詠んだのだろう。旅行の句を後年に詠むのはいい場合がある。すでに脳裏によつて醸されている場合が多いからだ。芭蕉も推敲した△女学生は五人それぞれが好みが違う面白さがある。「私も同じものを」といわない個性に面白さがある△こどもに何を持っているのかを訊ねると、手のひらを開いたら、青蛙がいて母親が仰天している光景。とにかくユニークな男のお孫さんである。驚きながらももしかしたらこの子は大成するかもとひそかに期待△藻の花の「髪梳くやうに」の独創的比喩が成功△朴の花が月光に抱かるるという若い感覚が素敵である△夏料理の鮎をかたどった箸置きを見て「岩鮎が跳ねている。料理もさぞ新鮮であろう」と挨拶。俳句は挨拶である△夏帽子の句は学生の頃兄と同居していたという。その兄に見立ててもらった夏帽子に兄の句いまで遣っているよう懐かしみで兄への憧憬と尊敬が今こもっている。

志方 章子

目高

旅先の川に降り立ち河鹿聞く
子規詠みし一八の花咲きにけり
目高死に同じ命と思ひけり
若楓明るき家に帰りきし
セルを着し母の写真のセピア色
若葉風吹いてきたるも気の晴れず
蜘蛛の糸日の差しくれば現れにけり
桐の花散りし辺りの明るかり
あぢさゐを背後にすくと孫文像
初夏や昼間も灯す孫文館

移情閣（神戸市舞子公園）

旅先で見るもの聞くもの珍しくて佳いが「章子くらの俳人に「旅先の」は不要、觀光俳句にならないよう気を付けた。△子規は「いちほつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす」正岡子規の詠んだイチハツの花が咲いた。花を見ながら子規に思いを馳せる△小さな目高であるが命あるものは体の大小を問わず同じ命を持っていると洞察△セルを着た母の写真もセピア色に褪せてきたよ。でも思い出は一向に褪せてこないと△心地良いはずの若葉風も心を晴らしてはくれない。このように詠って俳句に自らを開放してやるのが文芸の生命でもある。△樹上に咲いているよりも地上に散り敷いた方が明るいという気づきが佳い△孫文（孫中山）そんちゅうさん）は中華民国の革命家。その記念資料がある。

山稜抄

青葉潮

青葉潮はやなつかしき嬰兒の夢
桑の実の紅の唇尖がらせり
傾ぐ日に引きずり帰る捕虫網
暮れなむともうくれてをり五月闇
腹みせて蝮死にをり鳶の空
ひらがなのりりりりりり竹落葉
金亀子死んだふりして生き返る
紫陽花の毬にかひなの打たれけり
しやりしやりと鎌研ぐ音や露涼し
あけぼののこゑの濡れゆくほととぎす

△「はやなつかしき」とはまだ見たこともない嬰兒（やや）の夢を見たよと驚いているのか。夢で好きな人に産ませた子供の顔をはつきりと思いついているようにも思える不思議な既視感か△桑は小説『天空の舟』や鈴木三重吉の小説『天竺の舟』や『天竺の舟』などにでてくるロマンの植物。昔はその辺の桑畑に沢山あった。桑には桑母がなり子供のおやつになった。熟した赤黒い実を食べると口の中が人を食ったようになる。その唇をとがらせた女の子の記憶か桑の実を食べた少女は美人に変身△「さつき闇」とは五月雨の降るころの曇りがちで陰鬱として昼なお暗いのも月の出ぬ闇夜をも言う。闇は不思議で官能な世界△竹の葉の散るさまを言葉で書いてみたのが挑戦がいい。△鎌を研ぐのは庭にころがしてある荒砥。研ぐとそのような音が確かにする。△ホトトギスの声が濡れるというのほこともよく詠んだ感覚△不二男は新たな試みをしようとしているのだから。いいことである。

はまなす抄

花莫産

新しき花莫産の香や忌を修す
子の遊ぶ花莫産の鉞あやふしや
若衆の法被新らし緑摘む
えごの花こんな散りてみて万朶
豌豆を摘みぬ残りは鳥まかせ
遠雷やローズマリーの香の厨
小判草有り処忘れてしまひけり
朴咲いて湧き水の音昂ぶれり
ひきがへる尻より土に逆戻り
媛陵の裾にけぶれる栗の花

△花莫産を敷いて法事を修した。がうっかり鉞を残していないかと不安が脳裏を過る。「あやふし」はそういうことである。想像するだけでぞつとする△「緑摘む」は松の緑摘むが正しいが「松の」を省略してある。庭師の若い男の粋な姿。△満開のえごの花なのに、まだまだ散るのだろうかと逆に心配△ローズマリーを台所近くに植えておくと夏場は香り良くすがすがしい。遠雷も却って心地よし。夕立の期待も△ヒキガエルのユーモアな姿が面白い△エンドウ豆の積み残しは鳥たちへのおすそ分けであるという慈悲の心がいい△小判草が咲いていた。だが、どこにあったのか忘れてしまったという。高齢になるとよくあること。いまさら小判など必要ないのだ。草むらにに残しておこう。小判草なら遺産相続問題は起らない△媛陵（えんりょう）とは皇后などの墓。栗の花の妖しい匂いが古代のロマン。景行天皇の妃の日岡陵か。それとも誰か姫の墓かも。

大内 幸子

山鳩の脇径あさり夏薊
一輛車今は二輛の青山河
二メートル離れて梅雨のレジの前
久しゆうに更衣して登校す
湯あみして漣寄する植田かな
梅雨寒や主なくした猫寄りぬ

作用抄
青山河

善野 行

聖五月抄
えんどう豆

籠り来し寝間に五月の風入るる
臥す日々に蛙の声の響き来し
のいばらの棘のしたしきひかりかな
豌豆の筋をとれとや書を措きぬ
鉄にほふ工場に隣る麦の秋
芍薬の活けておほきくほどけけり
毛虫取る朝な朝なの妻の眉
額髪少女のいろにみなみ風
教材を貰ひたるまま花は葉に
黎明の腰の痛みに杜鵑

△幸子のすごいところは淡々と住んでいる生活の中に詩と俳諧実味をみいだすところ。△山鳩の「脇径あさり」が特に佳い。山鳩にはどこか孤独と寂しさを感じさせ、童謡に詠われているせいかこの句も静かに道路の脇で餌を探っている静けさがある△青山河の景色をとらえどうとう一両車になったよというのでなく、二両に増えている驚き。地方によって廃線に追い込まれるところもあれば、人が増えているところもあるのだと△二メートル離れてとは社会的距離(フーシヤルディスタンス)。コロナウイルスのせいだと言わないところが佳い△学童たちは久しぶりに衣替えして夏姿で嬉しそうに登校してゆく姿を描いた△主を亡くした猫がすり寄ってくる。主と梅雨寒のせいであるのだろう。犬ばかりでなく、猫も主人を知っているのである。

△一句目、こもっていた部屋に薫る風を入れた。「風入れ」は梅雨が明けての虫干しで風を部屋に入れたのとは少し意味あいが違う。気鬱に風を通すのだ。源氏物語にでてくる香を焚きしめたというようなことでもあるがそれでは寝間の意味が濃くなる基本季語は「襖はずす」(風通し・風通り) △読書をしていると細君からエンドウ豆の筋を取ってと声がかかった。仕方なく書を脇に置いて豆の筋を取る。書から目を離すのは惜しいけれど怒らせないよう愛妻の命令には従うのであろう。幸せなひとときで他人には見せられない姿か△芍薬を剪って生けたら路地咲きのようにすぐにほどけたよという気づき。△毛虫を駆除する妻の大変な労働を詠んでいるが、どこかで妻の眉毛が毛虫のように思えるよという戯れも。△学校の講義の教材をもらったがコロナのため講義も再開されないから、いらだっている教師像。

住田千代子

野遊抄
筍

実桜の木椅子に濡れてゐたりけり
 ハンカチの花のひらりと夏に入る
 新しき布巾を下ろす今朝の夏
 筍を鍋に合はせて切りにけり
 露剥いて母のこゑ聞く心地かな
 本堂は戸を閉て沙羅の花あかり
 丹波なる雲の重たし栗の花
 オリーブの花や込み合ふカフェテラス
 はかなさの苔の上なる沙羅の花
 一軒の峠の蕎麦屋道をしへ

△桜の実は誰に食べられるでなしこの世に結実したせいがない。その悲しい実桜は雨の木椅子にただ濡れているばかり△新しい布巾を下ろすのが立夏らしい気分△筍（たけのこ）は主婦の何気ない日常に秀句が潜んでいることを証明。皮の付いたまま湯掻くから、鍋に入るように切つて入れたのだ。秀句は日常にひそむ。湯掻いてのち皮をむくとおどろくほど中身は小さい（夢風撰候補）△桜の実が木椅子に濡れて落ちているのを写生。おそらく昨夜の雨に実が落ちたことも思わせる△昔は露を剥きながら母と会話したのであろう。その思い出がよみがえる△沙羅の寺での作。僧侶が留守だったのだから△丹波は栗の産地。栗の花が重く咲いているが雲にその重さを転化してみせたのがうまい。「混み」と書かず正しく「込み」と表現したのは言葉に拘る短詩では適切△苔の褥がサラの花には相応しい。

永田万年青

桃の花

なにし負ふ源平咲きの桃の花
 子燕の翻りつつ戻り来る
 干し物の裾に流れて薫る風
 梅雨晴や垣根の花の彩りぬ
 ばてにけり梅雨入り前の高気温
 黄昏の川の涼風纏ひをり
 気が付かば俯きみたる溽暑かな
 青空に向ひてゐたるねぢれ花
 梅雨晴間路地の奥より猫の声
 涼風の広場に渡り暫し受く

△この欄の成功は一人十句発表にしたこと。万年青は今まで「なにし負ふ」などと枕詞を使わなかった。赤と白の咲き分けの桃の花と源平の紅白を対決させて須磨寺にあいさつした手柄△薫風の句には詩がある△写生句で子燕の姿を活写。「黄昏の涼風」などうまい捉え方で一步進んだ△「ねぢれ花」はねぢれながらも上空を目指すことの性をとらえたことなどずいぶんと上達進歩している△人が歩いているのを観ると実に様々な表情がある一部を抜き出した人間観察である。笑いながら歩くのも変に観られる。△万年青の作品は常にさらっとしているがそれに少し詩心を加えて情がかすかに表れるようになつてきている。「涼風」の句には特に清々しい。力がついてきているのだろう。努力が次の段階を思わせている。

谷口一献

甘酒

出口 誠

父の日

更衣して何するでなき日かな
メモになき甘酒買って叱られる
水打ちて再開の日の下駄の音
瑠璃色の夏空に鳶浮いてをり
消毒のそのままの手で抓む鯨
ぢりぢりと焦げる匂ひの夏マスク
句作りは真夜中が好き水中花
圏外へ出ず六月も了りけり
揚花火一番星を墜としけり
振花や天に昇りたがってゐる

父の日の感謝されない父がゐる
父の日や尊敬されない父がゐる
父の日や存在うすき父がゐる
父の日や怒鳴られてゐる父のゐる
父の日のプレゼントですパンツ五個
五月晴マスク離せぬ我等居て
よみがへる通勤ラッシュ五月晴
五月晴最後の一句できぬまま
歯みがきの仕方教わる夏の宵
テレビにも目もくれもせず夏の宵

△「甘酒」の句は微笑んでしまつ。奥方に買い物のメモを書いてちらつてしたが、そのメモにない甘酒をつい買ってしまつて叱られている場面が微笑ましい。こういう軽いユーモアが一献の真骨頂△打ち水の句は料亭がコロナ開放で再開した。その町に下駄の音が甦つて懐かしく響く場面。△彼は夜中に水中花を眺めながら句案を練る人なのである。△揚げ花火の一発目が一番星を落してしまつたよという発想が独自で面白い。観衆の眼にはしばらく花火しか映らない。振花の句は万年青と同じ発想。

△私生活がどんなに苦しくてもその精神を開放するのは文芸であり詩歌である。かつて詩人の高坂章は文芸は希望の架け橋であると提唱していた。△いま誠がその泥沼に喘いでいても俳句を捨てないのには尊敬する。さすがである△父の日の尊敬されぬ父とは悲しい。しかし父の日の俳句を悲しい一日を詠むところに名句も生まれてゐる△気持ちよく空に向かつて深呼吸したいのに、それもできない疫病が流行る。庶民には祈ることしか方法がないのだ。最後の一句ができない苦しみは分る。それが最期でないのが救い。△歯磨きの方法は案外知らない。歯周囲が身体を壊すから注意△テレビ嫌いか、テレビを見るゆとりがないのか。平凡な暮らしは難しい。悩みは地獄である。俳句は苦悩を開放してくれる。

田尻勝子

木漏日

平居湊子

十薬

草刈り機四五羽の椋鳥従へて
 亡き夫の杖朝顔の手にありぬ
 百合咲いてきはまる老いを確かむる
 実石榴やフアラオの国の風流る
 小判草振ればちろろと音のして
 自から張り裂けてゐし梅雨茸
 道具屋の鏡にさわぐプラタナス
 木漏れ日になりたるつもりの鶉かな
 おはぐろのとんぼ野に出て長の旅
 棘々の曲り胡瓜や川の畑

笹百合の生ひし辺りを刈り残す
 水車小屋裏に廻れば著莪の花
 四万十川の沈下橋より草矢打つ
 十薬の香りにむせつ谷詰める
 あつけなく崩れし梅雨の茸かな
 封印を解かれし遊具風薫る
 緑蔭に太極拳の紅扇
 明易し濠の汀に紡ひ舟
 クレマチスこころもとなき支柱なり
 グライダー低空飛行走り梅雨

△田尻勝子は天才的な句を詠む。天才的というのは「時には」という但し書きがつく。彼女は主宰にポロクソにいわれても屈しない。その屈しない精神が時折びつくりするような句を生み出すのである。ただし今回△草刈り機の機はいらない。「草を刈る」でよい△亡くなった夫の杖は今朝顔の蔓にとられているのだ。千代女の句に類似△百合の花のように薫り高く気高いころの若さはもう失ったという嘆き。コロナに罹ったかも△梅雨茸はすぐに自滅するそれを客観的に言うときよいのだが△道具屋の鏡にプラタナスの写っている光景は素晴らしい。プラタナスも鏡も言葉がキラキラ△鶉は野にいたが今は飼われている。鶉の模様が木洩れ日のようなのだというだろう。江戸時代ならよかった。△おはぐろとんぼの句は下五が雑であるのが惜しい。「帰らざる」とか言えないのか。

△陵の草刈り。笹百合の茂る辺りはその美しさから刈り残す△水車小屋の裏にまわれば著莪の花の明るさに感動△むっとするほど十薬のびつり咲いている谷を尾根に向かつて進む句。谷を詰めるとは登山用語△梅雨の茸はたしかに脆いものが多く美しい。毒でも食べてみたいと思うことも△太極拳の緑と真赤な対比が美しい。夏の明け方に舟が舳つてある。もう草刈り作業でもおわったのだろうか△鉄線は茎が硬いが支柱はグラグラというのが面白い。支柱が逆に蔓に守られているのかと△一気に空をかけるのと一歩一歩山に登るとどっちがよいのだろう。

廣畑育子

代田

江見巖

肩たたき

前ぶれのなしに本日梅雨に入る
 雨激し蛙の声の高まりぬ
 夜蛙の一斉に止みまた鳴けり
 加古川の放流放送夏の鴨
 夏鴨の嘴カタカタと朝の畦
 十六文の足跡のある代田かな
 梅雨湿り仏間の襖ゆるびけり
 じはじはと水の浸み行く茄子畑
 傾ぐ枝の手にゆさゆさと朴の花
 膨らみを仰ぐ薄暮の合歡の花

海開き前うしろ立つ監視船
 父の日や子供のいない肩たたき
 時の日や遊んで帰るシンデレラ
 梔子の花の見てゐる法事かな
 サングラス外してみたき美人かな
 大毛虫枝の先まで食ひ尽くす
 螢火の戻つて来るや生命線
 甚平着て明日は誰に逢ひに行く
 父の日や時計落としてしまひけり
 病葉や転がつてくる団子虫

△梅雨の走りもなくいきなり梅雨入り宣言。心の準備があるのに△十六文の大きな足跡を代田にみた。まるで雪男が田を掻いたのであるうかという驚き。代田の足跡は二倍くらいに見える。△夏鴨は留鳥の鴨で最近では田んぼに飼育していると害虫や雑草を食べてくれる。カルガモのその美しさにや仕事草が可愛らしい△梅雨の湿りで仏間の襖まで緩んできた。仏様ごめんなきい。べこべこの梅雨の三味線月のぼる。西東三鬼」をふと思いついた△朴の花の句は情景がよくわからない。△合歡の花のふわつとしたふくらみを詠んだのであろう。やさしい句。

△父の日に子供がいれば肩たたきをしてきているのだらうなあ、という一抹の寂しさ。△時の日の零時を過ぎて帰る女子のこと。時代は大きく変わった感慨△故人はくちなしの花が咲いている頃亡くなったのだらう。法事を見ているのは故人である△サングラス美人がたしかに居る。だが、この句作者がサングラスをとってはつきりと見たいというのか、美女の掛けられているサングラスを外したいのか△作者の手から逃げた螢が再び戻ってきて生命線を照らしながら這っている。生命線がリアルで鑑賞が膨らむ△病葉は不覚にも秋の落葉を俟たず夏に病みを得て変色している葉。その辺に厚さゆえに落ちた病葉から転がり出たダンゴ虫の哀れも少し。

延川五十昭

はまぐり

延川笙子

陣屋跡

葉桜や蛤形の投句箱

夏暖簾両替商と染抜けり

火点さぬ川燈台や合歡の花

濡額は安政二年粽買ふ

左江戸右は京みち夏燕

絵馬に書く戀の字滲む青時雨

名物は芭蕉豆腐と冷酒

洪水の跡を無骨に刻む鑿

不破の関伊吹は雲の走り梅雨

梅花藻の清流に指浸しけり

葉桜や花の名所の川泊

五月雨や客待つ体の舳ひ舟

青葉風露路の奥なる大垣城

走り梅雨美濃路と刻む道標

三成の陣屋跡なる夏葡

早苗田や幟の分かつ関ヶ原

関ヶ原雲湧き立てる夏の陣

深閑と栗の花咲く不破の関

藻の花の莖伏しながら流れあり

水害を刻む石垣梅雨じめり

△桜の名所岐阜大垣の奥の細道終焉の地は今葉桜で観光客も少ない。ただ、芭蕉の詠んだ「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」にちなんだ蛤の容をした投句箱があるのもさすがだなあと挨拶したのである△川灯台が今も残っており、江戸時代の風情が漂っている。季節は今合歡の花が咲いていてやさしく川を灯しているよというのだ△夏つばめが盛んに飛んでいるが、江戸か京都が迷っているのだという。貴方ならどうするということなのだが、作者の位置がよくわかる句である△梅花藻は醒ヶ井の流れに咲く。芭蕉が醒ヶ井餅が美味しかったという手紙を書いている話をしたら五十昭夫婦は醒ヶ井まで餅を買いに行った。醒ヶ井の流れは冷たい水で指がちぎれそうになる。

△大垣市内を流れる川に大きな川船が繋かれ五月雨に濡れるばかりだという句△三成の陣屋跡は関ヶ原にあり、夏薊は三成にふさわしい例え。あまりよくない人のイメージがあるが別の見方もある△関ヶ原の戦場跡地に立つ幟が早苗田に立ててあつて家康方と三成方を分けているというのが佳い△不破の関は関ヶ原の近く。時代がずっとさかのぼり壬申の乱の翌年に設置されているから関ヶ原の戦いの千年ほど前のことである「秋風や数も鳥も不破の関」と芭蕉は詠んでいる△水害の句は岐阜城の石垣に「ここまで大水が来た」と水害の爪痕を刻んであるのを詠んだ。笙子は芭蕉の逆回り奥の細道の卒論を書いているという。その目の付け所が句に生かされてくるだろう。